

## 色彩特性と物理的特性との関係 IV

松崎 俊之\*

### The Relation between Color Properties and Physical Properties IV

Toshiyuki MATSUZAKI<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,  
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan*

#### 4.2 色彩に関する存在依存関係主義理論

本稿 4.1.3 (松崎 [2019]: 65-71) では、マッギンの提唱する色彩に関するスーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制を確認したのであるが、本節の狙いは、このスーパーヴィーニエンス傾性理論をひとつの基盤として、それをもとに色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な理解と色彩に関する関係主義理解を調停するためのあらたな理論を構想することにある。

このあらたな理論を構想するにあたって問題の焦点をなすのは、以下の三つの論点である。

(1)原初的特性としての色彩と関係的特性としての色彩との関係

(2)関係的特性としての色彩と物理的特性との関係

(3)原初的特性としての色彩と物理的特性との関係  
とくにこれら三つの論点との関連において、ここであらためてスーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制を押さえておかなければ、それは以下の二点にまとめられる。

(1)原初的特性としての色彩は傾性にスーパーヴィーンする。

(2)傾性は物理的特性に存在依存する。

スーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制と本節において問題の焦点をなす上記の三つの論点とを照らし合わせながら、色彩に関する素朴实在論(原初主義)的な理解と色彩に関する関係主義理解との調停を可能とするあらたな理論の構築に向けて採るべき戦略を示すならば、それは大きく以下の二点にまとめられる。

(1)傾性が関係的特性の一種としてこの関係的特性のもとに包摂されうることが明示することで、スーパーヴィーニエンス傾性理論における傾性を

関係的特性として捉え返す。

(2)原初的特性としての色彩と関係的特性との関係をスーパーヴィーニエンス関係としてではなく存在依存関係として捉え返す。

この基本戦略にしたがい、本節では、まず傾性と関係的特性との関係についてあらためて考察をおこなうことで傾性を関係的特性の一種として捉え返すことを試み(4.2.1)、ついで原初的特性としての色彩と関係的特性との関係(4.2.2)、および関係的特性と物理的特性との関係について論じ(4.2.3)、最後にそれまでの議論を総括するかたちで、色彩に関する素朴实在論(原始主義)的な理解と色彩に関する関係主義理解との調停を可能とするあらたな理論である「存在依存関係主義理論」の基本構制を呈示することにする(4.2.4)。

#### 4.2.1 傾性と関係的特性

傾性と関係的特性との関係についてはすでに本稿 4.1.2 (松崎 [2019]: 63-4) において取り上げたのであるが、そこでは、マッギンが挙げる色彩に関する傾性理論の蔵する四つの問題のうち二番目の問題との関連において、傾性が関係的特性の一種と見なされうることが簡潔に指摘しておいた。本項ではこの点も含め、両者の関係についてあらためて考察をおこなうことにするが、考察にあたってまずは関係的特性一般について押さえておくことにしよう。

関係的特性一般に関する定義的理解を示すならば、「関係的特性とはある対象が(その対象自体も含む)何らかのものとの関係において有する特性である」といったものとなる<sup>(1)</sup>。この点について、関係的特性のなかでもっとも単純な二項関係

<sup>\*</sup>石巻専修大学人間学部人間文化学科

## 色彩特性と物理的特性との関係 IV

(dyadic relation) を取り上げ、その具体的事例をもとに説明を加えるならば、以下ようになる。

いま仮に a と b という二つの対象 (物体) があり、a が b に比べより大きい場合、「a は b よりも大きい」という命題が真なる命題として成立することになるが、この命題における述語「b よりも大きい」は主語としての a に対する述語 (predicate) となっている (see Lemmon [1965]: 179-80)。したがって、「a は b よりも大きい」を「aRb」によって記号表現するならば、Rb が a に対する述語であるということになる。あらためて言うまでもなく、この述語が表わしているものこそ a のもつ関係的特性、すなわち「b よりも大きい」という特性に他ならない。

この二項関係に関する説明をもとに三項関係 (triadic relation) について考えてみるならば、三項関係からなる「a は b と c との関係において R である」という命題 (その記号表現は  $R(a, b, c)$  となる) の場合は、「b と c との関係において R である」( $R(\_b, c)$ ) が a に対する述語となり、この述語が指し示している「b と c との関係において R である」という特性が a のもつ関係的特性ということになる。

以上関係的特性一般の定義的理解を確認してきたのであるが、ついでその定義的理解をもとに「色彩は関係的特性である」と言われる際の関係的特性について見ておくことにしたい。

すでに本稿 1 (松崎 [2017]: 44) において論じたように、関係的特性としての色彩を構成する主たる関係項としては、①色彩知覚対象 O、②色彩知覚条件 PC、③ (主体の具える) 色彩知覚システム S の三種のものが挙げられることから、ここで問題となる関係 R とは、具体的には、「色彩知覚条件 PC のもとである色彩知覚システム S を具えた主体が対象 O を色彩知覚する」という、PC, S, O からなる三項関係 (その記号表現は  $R(O, PC, S)$ ) であると見なされることになる。あらためて言うまでもなく、関係的特性としての色彩はあくまで色彩知覚対象 O の具える特性であることから、ここで問題となる関係的特性は色彩知覚対象 O の具える「PC と S との関係において関係 R である」( $R(\_PC, S)$ ) ということになる。

まずはこの基本事項を押さえたうえで、本稿 1

(松崎 [2017]: 45) に示した関係主義的理解にもとづく色彩一般の定義【DCRT1】(色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとである色彩知覚システム S を具えた主体が対象 O を色彩知覚する [対象 O の色彩を知覚する] 際に、その対象 O が色彩知覚条件 PC および色彩知覚システム S との関係においてもつ関係的特性 RP) をもとにここで問題となる関係的特性の定義を定式化するならば、以下の【DRP1】が得られる。

【DRP1】関係的特性 RP = df 色彩知覚条件 PC と色彩知覚システム S を具えた主体との関係において対象 O のもつ特性

【DRP1】を見れば明らかのように、この定式は、ここで問題となる特性が色彩知覚条件 PC と色彩知覚システム S を具えた主体との関係において成立する対象 O のもつ関係的特性であることを告げるだけであって、その関係的特性がいかなる内実を具えるものであるかという点についてはまったく触れておらず、まさにその意味で、この定式はいまだ十全なものではないと言わざるを得ない。

ここで問題となる関係的特性のもつ内実を明示するにあたっては、本稿 4.1.1 (松崎 [2017]: 62) に示した傾性理論にもとづく色彩に関する定義【DCDT2】(色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる [たとえば「C に見える」、 「C に感じられる」] ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D) が大いに参考となる。そこで【DCDT2】をもとに、関係的特性の内実を明示するかたちで【DRP1】を再定式化するならば、以下の【DRP2】が得られる。

【DRP2】関係的特性 RP = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、 「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ特性<sup>(2)</sup>

以上「色彩は関係的特性である」と言われる際の関係的特性について見てきたのであるが、つぎに色彩に関する傾性理論における傾性についてみておくことにしよう。

傾性概念一般および色彩に関する傾性理論の基本構制については、本稿 4.1.1 (松崎 [2019]: 61-3)

に確認したとおりであるが、ここでは傾性理論にもとづく色彩の定義に関する定式である【DCDT2】をもとに、色彩に関する傾性理論において問題となる傾性についてあらためて考察を加えることにしたい。

考察に先立ちまずは【DCDT2】をあらためて示すならば、それは以下のようなものであった。

【DCDT2】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ傾性 D

この【DCDT2】をもとに、色彩に関する傾性理論において問題となる傾性の定義を定式化するならば、以下の【DD】が得られる。

【DD】傾性 D = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ特性

以上関係的特性と傾性についてあらためて検討を加えることで、両者に関する定義の定式化を試みてきたのであるが、以下ではこれらの定式をもとに関係的特性と傾性との関係について考察をおこなうことにしたい。

まず関係的特性の定式である【DRP1】と傾性に関する定式【DD】を見比べてみるならば、【DD】の定義項は問題となっている特性がいかなる内実を具えるかを明示するかたちで【DRP1】の定義項に限定を加えたものと解されるため、これら二つの定式から傾性は関係的特性の一種としてそこに包摂されるものであることが明らかとなる。他方で、関係的特性の定式【DRP2】と【DD】を見比べてみるならば、両特性が実質的に同一の特性であることが明らかとなる。傾性が関係的特性の一種としてそのもとに包摂される、ましてや両特性が実質的に同一の特性であるとするならば、マッギンの提唱するスーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制をなす原初的特性としての色彩の傾性へのスーパーヴィーニエンス関係を原初的特性としての色彩の関係的特性へのスーパーヴィーニエンス関係として捉え返す可能性が拓けることになる。

この点を踏まえ、本章冒頭に設定したその最終目標である、色彩に関する素朴实在論（原初主義）的な理解と関係主義理解を調停するためのあらたな理論の構築に向けて、われわれは、スーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制をなす原初的特性としての色彩の傾性へのスーパーヴィーニエンス関係を原初的特性としての色彩の関係的特性へのスーパーヴィーニエンス関係として捉え返すことにする<sup>(3)</sup>。

#### 4.2.2 原初的特性としての色彩の関係的特性への存在依存

前項では、傾性と関係的特性との関係をその定式をもとにあらためて検討することで、スーパーヴィーニエンス傾性理論の基本構制をなす原初的特性としての色彩の傾性へのスーパーヴィーニエンス関係を原初的特性としての色彩の関係的特性へのスーパーヴィーニエンス関係としてあらたに捉え返すことを提案したのであるが、それでは原初的特性としての色彩と関係的特性との関係をスーパーヴィーニエンス関係と捉える点についてはどうであろうか、こうした理解ははたして妥当なものと言えるのだろうか。

本稿 3.2（松崎 [2018]: 62-5）においてマクロリンらの議論をもとに指摘したように、スーパーヴィーニエンス関係とはあくまで二特性間の論理的関係のあり方を示すものに過ぎないのだが、原初的特性としての色彩と関係的特性との関係において問題となるのは両特性間のたんなる論理的関係ではなく、あくまで存在論的關係であることから、原初的特性としての色彩と関係的特性との関係はスーパーヴィーニエンス関係としてではなく、むしろ存在依存関係として捉えるのが妥当であると考えられる。

両特性の関係を存在依存関係として捉えるこうした理解は決してマッギンの理解と真っ向から対立するものではないと言える。というのも、本稿 4.1.3（松崎 [2019]: 66）にも述べたように、マッギンがスーパーヴィーニエンス概念を導入した最大の理由は、色彩と傾性（われわれのあらたな理解にしたがうならば関係的特性）とを同一視する、あるいは前者を後者に還元可能であるとする理解を斥けることにあったと考えられるからである。

## 色彩特性と物理的特性との関係 IV

すなわち、色彩と傾性（関係的特性）との非同一性、前者の後者への還元不可能性は、両者の関係をスーパーヴィーニエンス関係として捉えなくとも、それを存在依存関係として捉えることでそのまま保持されることになるのである。

以上の議論を踏まえ、われわれは、原始的特性としての色彩と関係的特性との関係を前者の後者への存在依存関係として理解することにすると、前項に挙げた関係的特性の定義【DRP2】を踏まえることで両者の関係をより精確に捉えるならば、「原初的特性としての色彩 C は、色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 RP に存在依存する」ということになる。

さて、本稿 3.1（松崎 [2018]: 59-61）にも指摘したように、存在依存にはいくつかの下位種が存在するのであるが（3.1 でとくに問題としたのは、そのうち「厳格存在依存」と「類的存在依存」の二種のものであった）、「原初的特性としての色彩は関係的特性に存在依存する」とされる際、その存在依存は具体的にはいかなる種類のもとと見なされるのだろうか。

結論から述べるならば、それは厳格存在依存であるということになるが<sup>(4)</sup>、このことを定式化したかたちで示すならば、以下ようになる。

【EDR(C → Rpu)】原初的特性としての色彩 C は、その存在を、色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こすという対象 O の具える関係的特性 Rpu<sup>(5)</sup> に厳格に依存する ≡ 必然的に、関係的特性 Rpu が存在する場合にかぎり原初的特性としての色彩 C は存在する（必然的に、原初的特性としての色彩 C が存在するならば関係的特性 Rpu は存在する）

### 4.2.3 関係的特性の物理的特性への存在依存

本稿 4.1.3（松崎 [2019]: 69）に論じたように、スーパーヴィーニエンス傾性理論において、色彩経験を引き起こす傾性にとってその基盤をなすのは色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具

える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 WPh であり、傾性とその基盤となる物理的特性（の集合）からなる総体 WPh との関係は前者の後者に対する存在依存関係として捉えることができる。

一方 4.2.1 では、スーパーヴィーニエンス傾性理論における傾性が関係的特性の一種としてそのもとに包摂される、それどころか両特性が実質的に同一の特性と見なされうることを指摘したのであるが、両者がこうした関係に立つとするならば、原初的特性としての色彩が存在依存する関係的特性にとってその基盤をなすのもまた色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 WPh であり、当該関係的特性とその基盤となる物理的特性（の集合）からなる総体との関係は前者の後者に対する存在依存関係であると解されることになる。

ここであらためて存在依存関係についてその基本理解を確認しておくならば、本稿 3.1（松崎 [2018]: 59）に見たように、一般に「x は y に存在依存する」と言われるとき、それは「必然的に、y が存在することなしには x は存在しない」、あるいは「必然的に、y が存在するときのみ x は存在する」ということを意味するが、この基本理解にしたがうならば、当該関係的特性が当該物理的特性（の集合）からなる総体 WPh に存在依存するとは、「必然的に、当該物理的特性（の集合）からなる総体 WPh が存在することなしには当該関係的特性は存在しない」、あるいは「必然的に、当該物理的特性（の集合）からなる総体 WPh が存在するときのみ当該関係的特性は存在する」ということを意味することになる。

以上の点を踏まえてここであらためて問わなければならないのは、原初的特性としての色彩が存在依存する関係的特性が、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 WPh に存在依存するとき、それは具体的にはいかなる事態を指し示しているのかという点である。

結論から言うならば、原初的特性としての色彩が存在依存する関係的特性が、色彩知覚対象 O、

色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 WPh に存在依存するとは、前者の関係的特性が後者の物理的特性（の集合）からなる総体 WPh によって実現（realize）されることを指し示しているものと解される<sup>(6)</sup>。

以下この点について具体例をもとに説明をおこなうことにしよう。

いま仮に、粘土 B からできたある彫像 A が存在するとした場合、「必然的に、粘土 B が存在することなしには彫像 A は存在しない」、あるいは「必然的に、粘土 B が存在するときのみ彫像 A は存在する」という意味で、「彫像 A は粘土 B に存在依存する」と考えられるが、事態を別の角度から捉えるならば、「彫像 A は粘土 B によって実現される」と見なされることになる。

これと同様に、原初的特性としての色彩が存在依存する関係的特性が、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 WPh に存在依存するとは、要するに、前者の関係的特性が後者の物理的特性（の集合）からなる総体 WPh によって実現されるということに他ならない。すなわち、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三項からなる可能的関係は、各項が物理的特性（の集合）によって充填されることによってはじめて現実的關係として成立することになると言えるのである<sup>(7)</sup>。

さて前項では、原初的特性としての色彩が関係的特性に存在依存するとされる際、その存在依存が具体的にはいかなる種類のものであるかを問題としたのであるが、それに倣って以下では、原初的特性としての色彩が存在依存する関係的特性が、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもつ物理的特性（の集合）からなる総体 Wph に存在依存するとされる際、その存在依存が具体的にはいかなる種類のものであるかを確認しておくことにしよう。

ここでとくに考慮に入れておかなければならないのは、メタメリズム現象である。本稿 3.4（松崎 [2018]: 65-9）ではいわゆる「メタメリズムの問

題」を取り上げ、その解消を試みたのであるが、そこでも指摘したように、問題の解消にあたって採られた理解は色彩一般に関しても妥当するものと見なされることから、少なくともメタメリズム現象を勘案するとしたならば、色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 Rpu を実現する物理的諸特性からなる総体 WPh は複数存在しうることになるため、関係的特性 Rpu の物理的諸特性からなる総体 WPh への存在依存は類的存在依存であると解されることになる。

このことを定式化したかたちで示すならば、以下のようなになる。

【EDG(RPu → pWPh)】色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる（たとえば「C に見える」、「C に感じられる」）ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 Rpu は、その存在を、関係的特性 Rpu を実現する、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 C、色彩知覚システム S のそれぞれがもちうる物理的諸特性からなる可能的総体 pWPh であるという性質 *F* をもった不特定のものどもに類的に依存する ≡ 必然的に、*F* をもった何か不特定のものが存在する場合にかぎり *x* は存在する（必然的に、*x* が存在するならば *F* をもった不特定のものが存在する）。

#### 4.2.4 存在依存関係主義理論 (EDRT) の基本構制

以上 4.2.1 から 4.2.3 にわたってわれわれは、マッギンの提唱する色彩に関するスーパーヴィーニエンス傾性理論を基盤としながらも、そこに必要な改変を加えることで、色彩に関する素朴實在論（原初主義）的な理解と関係主義理解を調停するためのあらたな理論の構築に従事してきたのであるが、このあらたな理論をマッギンによる「スーパーヴィーニエンス傾性理論 (supervenience dispositional theory)」という命名法に倣って、「存在依存関係主義理論 (existential dependence relationalist theory = EDRT)」と名づけることに

## 色彩特性と物理的特性との関係 IV

する。

この存在依存関係主義理論の基本構制をこれまでの議論をもとに示すならば、それは以下の四点にまとめられる。

(1)色彩は原初的特性としてある。

ここ言う「原初的特性 (primitive properties)」とは、4.1.3 (松崎 [2019]: 70) に確認したように、①内在的で、②単一的 (モノダ的) で、③実在的で、④表象的 (志向的) で、⑤現象的な特性を意味する。

(2)原初的特性としての色彩は関係的特性に厳格に存在依存する。

ここで問題となる関係的特性は、具体的には、4.2.1 に掲げた【DRP2】のかたちで示された関係的特性ということになる。確認のために【DRP2】を以下に再掲しておこう。

【DRP2】関係的特性 RP = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ特性

(3)関係的特性は物理的特性に類的に存在依存する。

4.2.3 で述べたように、「関係的特性は物理的特性に類的に存在依存する」とは、具体的には、原初的特性としての色彩 C が厳格に存在依存する関係的特性 RP は色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれにもちうる物理的諸特性からなる可能的総体 pWPh であるという性質 F をもった不特定のものどもに類的に存在依存するということの意味するが、これを別な角度から捉え返すならば、前者の関係的特性 RP が後者の物理的特性からなる可能的総体 pWPh によって実現されることを指し示していると考えられる。

(4)原初的特性としての色彩は物理的特性に類的に存在依存する。

上に見たように、色彩は原初的特性としてあり ((1))、この原初的特性としての色彩は関係的特性に厳格に存在依存し ((2))、さらに関係的特性は物理的特性に類的に存在依存する ((3)) ののであるが、存在依存関係は「推移的關係 (transitive relation)」であることから、上記(2)と(3)により「原初

的特性としての色彩は物理的特性に類的に存在依存する」ということが帰結することになる。

この点についてさらに詳しく述べるならば、以下のようになる。

まず存在依存関係が推移的關係であるという点に関してであるが、推移的關係とは一般に「A ならば B であり、かつ、B ならば C であるとするならば、A ならば C である」という関係を意味する (これを記号表現するならば  $[(A \rightarrow B) \wedge (B \rightarrow C)] \rightarrow (A \rightarrow C)$  となる) が、存在依存関係においては、「A が B に存在依存し、かつ、B が C に存在依存するとしたならば、A は C に存在依存する」という関係が成り立つことから、存在依存関係は推移的關係であることが明らかとなる。

さてこの点を踏まえて、あらためて存在依存関係主義理論において問題となる二種の存在依存関係、すなわち「原初的特性としての色彩の関係的特性への厳格存在依存」と「関係的特性の物理的特性への類的存在依存」との関係について考えてみるならば、その類種は異にするとはいえ、そのいずれもが存在依存関係であるかぎりにおいて、ここでもまた推移的關係が成立するものと見なされる。つまり、二種の存在依存関係の間に「原初的特性としての色彩が関係的特性に厳格に存在依存し、かつ、関係的特性が物理的特性に類的に存在依存するとしたならば、原初的特性としての色彩は物理的特性に類的に存在依存する」という関係が成り立つのである<sup>(8)</sup>。

上の議論から明らかのように、存在依存関係主義理論は本稿 3.1 (松崎 [2018]: 60) に掲げた物理的特性と色彩特性との関係に関する【基本テーゼ 3】「色彩特性は物理的特性に存在依存する」(その含意するところは、「色彩特性と物理的特性は同一ではなく、かつ、物理的特性は色彩特性の部分ではなく、かつ、必然的に、色彩特性が存在すれば物理的特性も存在する」という命題である) をその基本線において支持するものと言える。

以上存在依存関係主義理論の基本構制について四点にわたって論じてきたのであるが、そこでの議論を踏まえ、ここであらためて存在依存関係主義理論による色彩の定義を定式化したかたちで示すならば、それは以下のようなものとなる (なおその定式化にあたっては、それが過度に複雑なもの

となるのを避けるとともに、スーパーヴィーニエンス傾性理論にもとづく色彩の定義を定式化した【DCSDT】(松崎 [2019]: 70)をはじめとする色彩の定義に関する各種定式との比較を容易にするため、関係的特性 RP の物理的特性 (の集合) からなる可能的総体 pWPh への類的存在依存に関してはそれを定式のうちに盛り込むことは差し控えた)。

【DCEdRT】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 RP に厳格に存在依存する対象 O のもつ原初的特性 PP

因みに、存在依存関係主義理論による色彩の定義が関係主義理論にもとづく色彩に関する定義をその構成要素として自らのうちに組み込んでいることは、【DCEdRT】のうちに註(2)に示した関係主義理論にもとづく色彩に関する定義【DCRT2】が含まれていることから明らかである。確認のために【DCRT2】を以下に再掲しておこう。

【DCRT2】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 RP

最後に、参考までに【DCEdRT】を踏まえたかたちで存在依存関係主義理論による「赤」の定義を定式化して示しておくならば、それは以下のようなものとなる。

【DREDRT】赤 = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して赤と直接的に関連づけられる (たとえば「赤く見える」、「赤く感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 RP に厳格に存在依存する対象 O のもつ原初的特性 PP

## 註

(1)「その対象自体も含む」と言う一句からも明らかのように、ここではある対象の自己自身との関係、すなわち「自己関係」もまた関係の一種として捉えられている。  
(2)参考までに、【DRP2】との関連において関係主義理論にもとづく色彩に関する定義を定式化して示してお

くならば、以下の【DCRT2】が得られる。

【DCRT2】色彩 C = df 色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こす対象 O のもつ関係的特性 RP

(3)本稿 4.1.2 (松崎 [2019]: 63-5) では、色彩に関する傾性理論の蔵する問題として四つのもを挙げたのであるが、傾性が関係的特性の一種としてそのもとに包摂される、ましてや両特性が実質的に同一の特性であるとするならば、それらの問題は色彩を関係的特性として捉える理解においてもそのままのかたちで残存することになる。

(4)ここでは関係的特性 RP はトロープとしてではなく、あくまで普遍者として捉えられている点はとくに注意を要する。仮に関係的特性 RP をトロープとして捉えたとするならば、原初的特性としての色彩の関係的特性への存在依存は類的存在依存ということになる。いま試みに原初的特性としての色彩 C とトロープとしての関係的特性 RPt への依存関係を定式化したかたちで示しておくならば、以下のようになる。

【EDG(C → RPt)】原初的特性としての色彩 C は、その存在を、色彩知覚条件 PC のもとで色彩知覚システム S を具えた主体に対して色彩 C と直接的に関連づけられる (たとえば「C に見える」、「C に感じられる」) ような感覚反応 SR を引き起こすという性質 F をもった対象 O の具える不特定の関係的特性 RPt に類的に依存する ≡ 必然的に、F をもった何か不特定の関係的特性 RPt が存在する場合にかぎり原初的特性としての色彩 C は存在する (必然的に、原初的特性としての色彩 C が存在するならば F をもった不特定の関係的特性 RPt が存在する)。

なお、トロープ概念一般については Maurin [2014] を、またトロープとしての関係的特性、すなわち「関係的トロープ (relational tropes)」については Trettin [2007] を参照されたい。

(5)「RPu」は普遍者としての関係的特性を意味する。なおこの点に関しては、前註 (4) もあわせて参照のこと。

(6)アームストロングによれば、「ある関係が実在する (existent) ためには、それが時間と場所において例化され (instantiated) なければならない」(Armstrong [2010]: 23) ことになるが、アームストロングの言う「例化 (instantiation)」をわれわれの言う「実現 (realization)」に当たるものと解するならば、原初的特性として

## 色彩特性と物理的特性との関係 IV

の色彩が存在依存する関係的特性が実在するためには、それが「(ある) 時間と場所において」色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 PC、主体の具える色彩知覚システム S の三者がそれぞれもつ物理的特性 (の集合) からなる総体 WPh によって実現されなければならないということになる。

(7) 以上のことを記号表現を用いて一般化したかたちで捉えるならば、以下ようになる。三項関係  $R(x, y, z)$  が実現されるとは、「R の関係にある  $x$  と  $y$  と  $z$  が存在する」( $x, y, z$  はそれぞれ個体変項) という命題  $\exists x \exists y \exists z R(x, y, z)$  を真とする個体定項  $a, b, c$  が存在するということであり、これを別の角度から捉えるならば、 $\exists x \exists y \exists z R(x, y, z)$  を真とする個体  $a, b, c$  を関係  $R(x, y, z)$  に充填することで、可能的関係  $R(x, y, z)$  を現実的關係  $R(a, b, c)$  に変ずるということの意味する。

(8) 「原初的特性としての色彩の関係的特性への厳格存在依存」と「関係的特性の物理的特性への類的存在依存」との間の推移的關係を、本稿 3.1 の註(6)および(9) (松崎 [2018]: 69) に挙げた、コレイアによる厳格存在依存と類的存在依存に関する記号表現を用いて表記するならば、以下ようになる (Correia [2008]: 3)。

$$[\Box(Ex \rightarrow Ey) \wedge \Box(Ey \rightarrow \exists zFz)] \rightarrow \Box(Ex \rightarrow \exists zFz)$$
 因みに、「 $x$ 」は原初的特性としての色彩 C を、「 $y$ 」は関係的特性 RP を、「 $F$ 」は「関係的特性 RPu を実現する、色彩知覚対象 O、色彩知覚条件 C、色彩知覚システム S のそれぞれがもちうる物理的諸特性からなる可能的総

体 pWPh であるという性質」をそれぞれ指している。

### 参考文献

- Armstrong, David. [2010]. "Relations." Chapter 3 of his *Sketch for a Systematic Metaphysics*. Oxford: Oxford University Press, pp.22-5.
- Correia, Fabrice. [2008]. "Ontological Dependence." *Philosophy Compass* 3(5): 1013-32.
- Lemmon, Edward J. [1965]. *Beginning Logic*. London: Chapman & Hall (E. J. レモン『論理学初歩』竹尾治一郎、浅野植英訳、世界思想社、1973年)。
- Maurin, Anna-Sofia. [2014]. "Tropes." Edward N. Zalta (ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2014 Edition). URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2014/entries/tropes/>>.
- Trettin, Käthe. [2007]. "Tropes and Relations." *The Proceedings of the Twenty-First World Congress of Philosophy* 12: 155-9.
- 松崎俊之. [2017]. 「色彩特性と物理的特性との関係 I」、『石巻専修大学 研究紀要』第 28 号、43-54 頁。
- . [2018]. 「色彩特性と物理的特性との関係 II」、『石巻専修大学 研究紀要』第 29 号、59-72 頁。
- . [2019]. 「色彩特性と物理的特性との関係 III」、『石巻専修大学 研究紀要』第 30 号、61-73 頁。